
月の魔法

有月 悠

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

月の魔法

【Nコード】

N7722C

【作者名】

有月 悠

【あらすじ】

私はある日猫を飼い始めた。そのかわいさに、ある願いを口にしたら本当になつて・・・。

(前書き)

初投稿です (^ ^) コメント下さると嬉しいです。

月の魔法

私はただのOL、25歳。

生来の引つ込み思案で、恋人いない歴25年。

ある日大型ショッピングモールのペットショップでロシアンブルの子猫を見つけた。

178,000円。

高いとは思わなかった。

特別趣味もなく、付き合いも少ない私には通帳の残高は0が多いくらいだ。その場で購入を決めた。

名前はリヨーにした。

ロシアンブルーだからロシア、ロシアと言えばマトリョーシユカ、だからリヨー。

リヨーはとてもおりこうさんだった。

トイレも爪とぎもすぐに覚えて失敗なんかしない。

出かける時は玄関までお見送り、帰ってきたら玄関でお出迎え。

私は毎日楽しくて仕方がなくなった。

仕事で疲れて嫌なことがあっても、帰ったらリヨーがいると思えば不思議と心が軽くなった。

私はある時ふと口にした。

「お前が人間だったらいいのに」

リヨーはきらきらとしたエメラルドグリーンの瞳を向けるだけだった。

「御主人様……!!」

私はやたらテンションの高い声に起こされた。

何？御主人様？

目を開けるとそこに見知らぬ男がいた。

満面の笑みを浮かべ、まるでいい子いい子してくれと言わんばかり。

誰……？

あまりの無垢な笑顔に、私の頭は意外と冷静に動き始めた。

ええつと、ここは私の部屋、私は一人暮らし、男なんて連れ込んでないし、縁もない。

昨日は仕事でちよつと残業があつていつもより帰るの遅れたけど飲みにとか行つてないし、いつも通りで……。

「御主人様？」

目の前の男は首を傾げた。

よくよく見たらとてもとてもきれいな顔をしていた。

年は20前後だろうか、やわらかなシルバークレイの髪、くりつとした大きな瞳、色はエメラルドグリーン。

そして私を「御主人様」と呼んだ。

まさか、まさか……。

「リョ、リョーなの……？」

「そつだよ、ぼく人間になつたんだ！」

リョーはぴよんと立ち上がつて抱きついてきた。

が、私はそこに見てはいけないものを見てしまった。

「ぎゃー……!!ちよつと待つた……!!」

私は布団を引っつかんでリョーに力の限り投げつけた。

だって、裸だつたんだもの……!

「んぎゃつ……」

リョーは押されたいきおいで、床にべちゃんと叩きつけられた。

「いったい・・・どういうことなの・・・」

私は大慌てでコンビニに行つて男物のパンツとシャツとズボンを買つてきて着せた。

コンビニがこんなにありがたいものだと思つたのは初めてだった。

リヨーは私がつつた朝ごはんを犬食いならぬ猫食いしている。

「御主人様が人間になつてほしいつて言つたから、ぼく人間になつたんだ」

私は記憶を逆回転させる。確かに言つた。いつかは忘れた、でもそんなに近くない。

でもあれはただの戯れ言、本気で願つたわけじゃない。

リヨーはご飯をたいらげていつものように顔を洗つている。

「こ、こら、人間になつたんでしょ！？人間はそんなふうに顔を洗わないでしょ!？」

「そつか」

リヨーは立ち上がつて洗面所へ向かつた。

いつも私がやっていることを見ていたのだろうか？

この頭の良さ、やっぱりリヨーは素敵な猫だ・・・いやもう人間なんだけど・・・。

でも、いったこれからどうしたら・・・？

とにかく服をあつらえてやることにした。

スラリとした体型、きれいな顔立ち、それなりの格好をさせて歩いたら、きつと芸能人のようだろう。

私はそんなきれいな人と並んで歩くのが夢だった。

眠たがるリヨーを引つ立てて、私たちは電車に乗つた。

繁華街に出て目に付いたメンズの店に入る。

「あ、あのっ・・・」

男の人のファッションなんて分からない。店員さん呼び止めてリヨーに似合うような服を選んでくれと頼んだ。

店員さんにはにつこり微笑んでたくさん服の中からてきぱきと選
び出し、リヨールはあつという間に今どきの青年に変わった。

「どう？似合う似合う？」

リヨールは嬉しそうにくるりと回って見せた。

私は鼻血が出る思いだった。

私たちはそのまま店を出て、繁華街を歩いた。

腕を組んで歩けば恋人同士のように見えるだろう。

こんなにかっこいい人と並んで歩いて私はとてもとても気分が良
かった。

すれ違う人たちが振り返る、スカウトらしき人が声をかけてくる。
もちろん全てリヨールに向けられるものだったが、私は自分のこと
のようで嬉しかった。

リヨールは私の猫だもの。

「今日は本当に楽しかった・・・」

夜になって、私たちは人気のない公園に来ていた。

空には大きな満月が浮かんでいる。

ベンチに座り、私はそつとリヨールに寄り添った。リヨールは私の肩
を優しく抱き寄せた。

「もう、行かなくちゃ」

リヨールが小さくつぶやいた。

「え・・・？」

「もう魔法が解ける。ぼくは行かなくちゃ」

「何・・・？魔法！？行くなって、いったいどこに!？」

リヨールは優しく微笑んだ。

「ぼくは月の魔法で人間にしてもらったんだ。期限は1日だけ、引
き換えは命」

「・・・!？」

「御主人様の願いを叶えられて、ぼくは嬉しかった」

「命!? ねえ、命ってどういうこと!? ねえ、ねえ!」

私はリヨ一の肩を掴んでゆすった。

リヨ一は優しく微笑んだままだ。

ふいに周りが明るくなった。

リヨ一の体が淡い色を帯びて輝きだす。

「嘘、嘘・・・」

「御主人様、どうか、悲しまないで。ぼくは望んでこうなることを決めたんだ」

リヨ一は消えかかった指で私の頬をぬぐった。

「そして何も恐れないで・・・御主人様はオクテがすぎる」

「ば、ばかつ・・・」

服がストンと落ちた。

「い、いや・・・そんな・・・」

風が吹いて、主を失った袖が裾が、はたはたとはためく。

「リヨ、リヨ一・・・」

シャツの中央が少しふくらんでいる。触れると柔らかな感触がした。

「リヨ一!」

服の中からは、小さな亡骸が出てきた。

前足を触ると、少し濡れているのに気がついた。さっきの私の涙に違いない・・・。

「リヨ一・・・!」

それから私はリヨ一の小さな体を持って部屋に帰った。

次の日は会社を無断欠席した。

携帯が鳴ると電源を切った。

夕方、誰かがやってきてさんざんベルを鳴らしたが、無視した。

その次の日は両親が大家さんとともにやってきた。

私は虚ろな目で3人を見た。

少々匂いはじめたりヨーを見て、父親は私を張り倒し、母親が白いタオルを探してリヨーをくるんだ。

リヨーはすぐ動物のペット用の霊苑で火葬することが決まった。

私は火葬場でずっと泣いていた。

小さなお棺に入れる時も、さらに小さな箱に入って戻ってきた時も。

涙はあふれてあふれて止まらなかった。

私は骨壺を持って離せなかった

霊苑の住職さんが、見かねて声をかけてきた。

「お嬢さん、悲しいのはわかるが、そんなに悲しんじゃいかん」

私はハツとなった。

リヨーが言ったのを思い出したからだ、悲しまないで、と。

「命あるものはいつか必ず死ぬものだ。仕方ない」

「違うの、私が死なせてしまったの・・・」

「・・・？」

「私がばかだったの。あんなあさはかな願いをしなければ・・・」

そう、私がばかだったせいで、あの純粹で小さな命は、その命をこんなばかな私のために自ら短くしてしまった。

恋人が欲しかった。だけどいつもあきらめていた。容姿も何も、自信がない。

人間の恋人が欲しければ自分で動けばよかったのだ。

そうすれば、あの小さな命を犠牲にすることなどなかった。

「きつと、その猫さんは、お前さんのことが大好きだったんじやろう。悲しむことはない、お前さんが死なせたんじやない」

「でも・・・」

「お嬢さん、何かを得るには、何か失うものだ。喜びがなければ、悲しみもない。だが、そんなもの何の意味があろう。その猫さんは教えてくれたんじゃないかね、失ってなお得られるもののほうが尊

いと」

「リヨ・・・」

(御主人様、何も恐れなくて)

リヨの最後の言葉がリフレインする。

ありがとう、リヨ・・・。

それから私は年下の恋人をすぐに見つけた。

顔立ちがリヨによく似ていて、話しかけずにいられなかった。

何も恐れない強気のアタックが成功して、彼は私の側にいてくれるようになった。

そしてずっといつまでも一緒にと・・・。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7722c/>

月の魔法

2009年7月1日21時21分発行